

熊本城 復興に向けて

〈10〉熊本城内の軍施設

九州の中央に位置していた熊本市は、政府の出先機関を置くには便利な土地柄でした。陸軍第六師団や官公庁の施設が集中するようになると、街の中央に位置する陸軍の施設が熊本市発展の支障となりました。明治14年(1881)5月19日付けの『熊本新聞』には次のような記載があります。「今の熊本市街を見渡して支障となっているのは、市街中央に位置する練兵場(山崎練兵場)である。仮に練兵場を他の地域に移転させ現在の練兵場を市街地としたならば、(中略)熊本市街はますます繁栄するであろう」

第2代熊本市長の松崎為己は、市民の要望を背景に明治30年(1897)7月に、市区改正(練兵場移転問題)調査費用を市会に提案。しかし、この議案が市会を通過して2日後、松崎市長は突如市長を辞任します。そこでこの問題を解決したのが、第3代辛島格です。

明治30年(1897)辛島市長は、練兵場敷地交換の内許可願提出について市会の同意を得るため、諮問(有識者または一定機関に意見を求めること)案を市会に提出。同時に熊本県も共同歩調をとりました。明治31年(1898)1月、熊本県知事大浦兼武は『旧練兵場敷地交換願之義二付上申』を、陸軍大臣桂太郎に提出します。また、5月には第六師団の意見書として「大変実利のある事である。この交換を逃したならば後悔するであろう。(中略)速やかに決断されることを望む」と回答。12月内務大臣西郷従道は、山崎町と大江村との交換認可の訓令を熊本県知事徳久恒範に発令。12月17日ようやく山崎練兵場の交換が正式に許可されました。この交換の中、備前堀西側の野戦砲兵第六連隊移転に伴い、新町方面と花畑町を結ぶ道路建設がもち上がります。現在の国立病院機構熊本医療センター下を通る道路が延長整備され、明治32年(1899)に桜橋が架設されました。

その後備前堀から古城にかけての一帯は兵器部倉庫として利



▲陸軍兵器廠煉瓦倉庫
行幸坂から桜馬場方面を望む風景。
〔熊本日日新聞社提供〕



▶旧合同庁舎確認調査時の
煉瓦倉庫基礎

用され、現在の桜の馬場城彩苑一帯には明治42年(1909)から昭和12年(1937)頃にかけて、赤煉瓦の倉庫4棟が建設されました。1棟の大きさは、梁間8間(約14.4m)、桁行50間(約90m)の2階建ての建物で、戦後アメリカ軍も倉庫として利用しました。同様の煉瓦倉庫は、熊本と同じく陸軍が配置された各都市に建設されました。中でも金沢、姫路、香川、広島では倉庫建物が現存しており、特に金沢では重要文化財に指定されています。昭和35・36年(1960・61)の熊本国体水泳会場建設と合同庁舎建設に伴い、全てが取り壊されました。

近年、城彩苑建設と合同庁舎解体に先立って、確認調査を実施しました。調査の結果、煉瓦倉庫の基礎部分が見つかり、基礎の一部は城彩苑西側駐車場の一角で、現在も見学することができます。

(熊本城調査研究センター 山下 宗親)